

◆池田亮二 選

よく散歩する隅田川沿いの三囲神社の境内に宝井其角の句碑があります。

ゆふだちや田をみめぐりの神なれば

なんということのない句だと思っていましたが、近ごろそのおかしみが分かるようになりました。これは雨乞いの句で干ばつに苦しんでいたのが、この句を詠んだ翌日大雨に恵まれたと由緒書にあります。夕立を神と見立てたわけで、さしずめ私なら、

夕立は田守る神の立ちしょんべん

といったところか。

其角は忠臣蔵の中で大高源吾との出会いの場にちょっと顔を出すわき役みたいなものですが、当時は蕉門の第一高足として師に最も愛された江戸中期の大文化人です。「晋其角ハ江戸ノ産、医家ニ生レテ医術ヲ学バズ終ニ俳諧ヲ業トス、蕉門ノ一人、後ニ一風ヲ起ス」(本朝文選)、彼は大兵肥満の江戸っ子のように、妙におかしみのあるまじめだかふざけているのかわからない句が多く、それが几帳面な師から愛されたような気がします。そして私が好きなのはやはり彼の酒の句です。下戸の人には申し訳ないが、私にとって句会といえは酒席であり、一杯飲んで駄句をひねり、ほめたりけなしたりしては飲んで、しまいには句はそっちのけで…というのが常でした。だから俳句と酒とはごく親しい間柄だと思っていたのですが、ちょっと調べてみると酒の句というのは意外に少ないようです。手元にある江戸時代の俳諧集を繰ってみても、蕉門はじめそうそうたる俳人も酒を詠んだ句は数えるほどしかない。やはり花鳥風月が主役だから、たまにそこ

---

に酒が出てきてもそれはいわば引き立て役にすぎないようで。

その中で其角だけは酒の句がだんとつに多いのを見つけ、嬉しくなります。(探し出したのは約三十句)。しかも其角の場合は酒が主役で花や月は付け合せのパセリのように扱われている。その中から小生好みのいくつかを挙げると、

名月や居酒飲まんと頬かぶり

十五から酒をのみ出で今日の月

酒を妻妻を妾の花見かな

もどかしや雛に対して小盃

季語は月でも花でも主役は酒。其角先生は月や花など横目に睨んでもっぱら盃を重ねていたんじゃないかと思うほど。今日なら「十五から…」は法律違反、「酒を妻…」など即離婚沙汰の句でしょう。ちなみに蓼太は「四十から酒のみ習ふ夜寒かな」などというさみしい句をつくっている。

私の探した限りでは、其角に次いで酒の句が多いのは師匠の芭蕉翁、何となく謹直で遠い存在だったのが急に身近に感じられます。(探し当てたのは約二十句)。

月花もなくて酒のむひとりかな

などみると、芭蕉さんも酒好きのお人だったようです。もっとも酒との付き合いは、師匠芭蕉の酒句はほろ酔いの句であるのに対して、弟子其角の酒の句は酔っぱらいの酪酊句であるとでもいえますか。其角はにぎやかな酒を飲んだのに対して芭蕉は一人静かに飲む酒。芭蕉の句については誰でも詳しいのに、小生が引き合いにだすのもおこがましいですが、酒の句だけについてみれば、

酒飲めばいとど寝られぬ夜の雪

昼の酒寐てから酔のほかつきて

酒飲めば谷の朽木も佛なり

と静かなものです。これに対して其角のは、

花盛りふくべふみ割る人も有

その花に歩きながらや小盃

と何やら三味線の伴奏が聞こえそうな感じ。芭蕉は伊賀の藤堂家に仕えた元サムライ、其角は江戸の医者の子道楽息子という違いかもしれませんが。其角は師芭蕉より十七歳年下、師匠は弟子の酒をいさめて、某親王さまの飲酒起請文を引き合いにだして「貴丈常々大酒をせられ候故、この文字を写して大酒はご無用に候…」と忠告の手紙を書いています。だがその師匠に、

ゆきや砂うまより落て酒の酔

という句があります。これはどうしたことか。師匠も馬から落ちるほど飲んだのか。下が雪や砂でなければ命もあぶない！ついでにもう一つ、

酔て牛より落る春風

という連歌のつけ句も残しています。牛からも落ちた！これでは大酒のいましめも返上されそうです。

其角の墓は、東京北烏山の称住院の境内に“其角堂”という小さな祠があり、その傍らに父の墓と並んで立っています。高さ六〇センチほどのダルマのような姿で、一〇センチほど沈み込んでいますが、二つともまったく同形で、父子寄り添うように傾いて、並んで千鳥足で歩いているようなたたずまい。寺の人の話では、傍らの松の根が張って、こんな風になったのだと。

我死ば桃梅柳うすき酒 其角

(二〇一五・二・二五)